

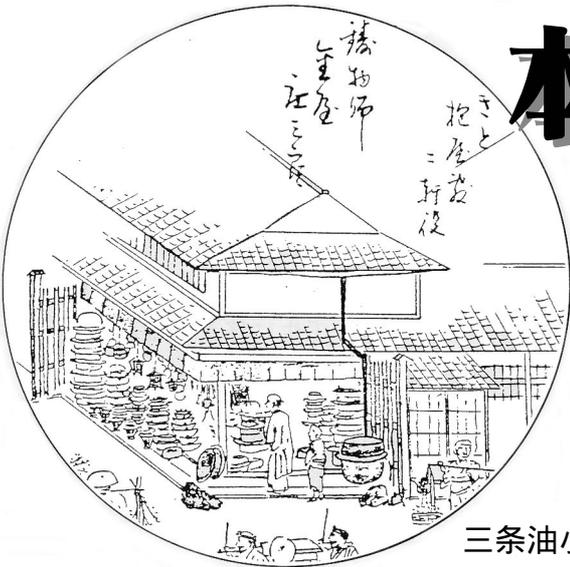
本能まちづくりニュース

第37号 平成19年3月1日発行

本能まちづくり委員会
委員長 西嶋直和

E-mail: post@honnoh.net
URL http://www.honnoh.net

本能まちづくりニュースのカラー版は、ホームページでご覧ください。



三条油小路町絵図より鑄物師釜屋庄三郎方

これからの“染のまち本能”への提案

昨秋11月、平成18年度都市再生モデル調査対象事業としての“おいでやす染のまち本能”の開催にあたりましては、学区の皆様のご協力をいただき、ありがとうございました。紙面を通じて深く御礼申し上げます。本年1月26日、本能まちづくり委員会は、本もの推進会議の職人さんたちとともに、この“おいでやす染のまち本能”の反省と今後への提案につき話し合いました。

イベント当日行った参加者アンケート調査では、回答者(両日合計217名)は、4割男性6割女性、50代と30代が各25%弱でした。居住地は近畿地方で9割、関東・九州からも来られていました。イベントを知れたきっかけは「友人・知人の紹介」が最も多くて50%近く、口コミでも広まってきているようです。“おいでやす染のまち本能”の企画の中で「公開工房ツアー」と「実演見学」は7割参加され、「のれんスタンプラリー」は半数でした。各人の制約された時間内に全ての企画に参加するのは厳しかったようです。各企画についての感想は「大変よかった」「よかった」の回答がほとんどでした。

「公開工房ツアー」と「実演見学」には「普段見ることのできない工房を見学させてもらえ、丁寧な説明も聞け、体験もできてよかった。職人さんの技はすばらしい。伝統を継ぐことの難しさを感じたが、着物の良さをみんなに知ってもらって、着物づくりを大切にしていってほしい」というご意見をいただきました。「のれんの華スタンプラリー」については、「のれんのような色が通りを彩り、美しくもあり、おもしろいアイデアだった」「色の勉強になり、パンフの色見本や説明を残しておきたい。」「マイキモノプロデュース」については「職人さんと相談しながら作れるところがよかった」「また眺めたい」という意見が多かったです。

まちづくり活動やイベントについて、「地域の人、スタッフが親切。皆さんが力を合わせて取り組んでおられる熱意に感動した。」「継続していただきたいイベントです」「また参加します」という励ましもありました。



今後にむけての提案は、公開工房の増加・受付やスタンプリアの改善・着付けや外国人向けのサービス提供・お土産品の販売・イベント情報発信、地元PRの工夫などでした。

一方、実演・工房公開に協力された職人さんの感想は「説明が上達した」「見る人によって時間制限があり、どこまで説明したらよいかかわらず、中途半端になることがある。じっくり見て欲しいし、説明もしたい。」「見本に展示していたものを買いたいというお客さんがあった」「公開工房で、見学グループが重なることがある。工房によっては、うまく流れる所と、待ってもらったり、同じ説明を二度聞いてもらったり、申し訳ない事態も起こる」「体験教室は、個人差があり指導は難しいが、今回は出来上がるまでできた(糸を解いて絞り柄を見る)ので、参加者同士が自分の



の作品を見せ合うことができよかった。リピーターもおられ嬉しい。」「技術の公開を続けることによって若い人の関心を惹くことになってきたのではないか」等でした。

将来にむけての助言や提案をいただきました。

京都府立大学宗田先生:公開工房とマイキモノプロデュースは「着物を眺めるのなら、京都に行って職人さんの顔を見て、手頃価格で」というもので、今までとは違い、「着物プラス」の買い方であり、新しい

流通の道を切り開くことになる。「ここに職人がいる」ということを世界の市場に向けて地道に発信し続けていると、「ここにしか任せられないから」という注文が来るかもしれない。従来とは違ったネットワークができてビジネスチャンスが生まれ、本能を京友禅の産地として再生させることが可能になるかもしれない。直接消費者に結びつき、世界の市場に接する21世紀型の職人像であろう。幸い行政の支援もつけ、NHK等のマスコミからもPRの機会を得ているのだから、これらを生かして頑張ろう。そもそも「まちづくり活動」のひとつとして始まった着物文化の発信が、旧来の方法を繰り返すだけではできない産地再生を実現する、本当の意味でのまちづくりになるかも知れない。

立命館大学乾先生：公開工房や実演、のれんの華などで見せられる技術やアイデアはすごいものである。これらを地域の誇りとして次世代に伝えてほしい。また興味を持って本能にやってくるファンをつくることできれば地域活性化につながる。マイキモノプロデュースはただ着物を買うというのではなく、プラスの部分が多い。各自が職人さんの話を聞き、手仕事の現場を見て、感動をともなった「物語」をつくりながら眺めることができるから、これが魅力となっている。マイキモノ経験者を核にファンクラブのようなものをつくり着物愛好家のすそ野を広げてはどうか？

職人さん：大学の講座の一つとして工房の公開や講義を受持っている。こちらの「公開工房」にも参加して、口下手であったのが流暢に説明できるようになったからだ。大学に受け入れられるようになったのだから、逆にこちらが大学の方式を取り入れて講義をしたり、たとえば着物検定で工程を見て学ぶランクの問題も出てくるかも知れないから研修を受け入れたり、また東京の京都館に出張実演したりしてはどうか？

着物のショーウィンドウを出したら引き合いがあ

本能のれんの華 出張披露

2月15日～28日「通りが舞台 人が行き交う 京のまち」(ひと・まち交流館 京都1階)において「京都創生景観シンポジウム」にあわせて、本能まちづくり委員会で制作したパネル・本能のれんの華・職人さんの道具などが企画展示されました。3月10・11日(土・日)には、中京区役所4階第1会議室にての「京のまちなか伝統工芸品展～伝統の色彩華やかに～」で、再び展示されます。是非足をお運びください。

ひと・まち交流館京都「本能に咲くのれんの華」



る。着物の好きなお客さんと直接対話しながら作れて、手応えがある

一般のお客さんのためにたとえば着物のアフターケアや和装小物の取り扱いのお店などの案内マップを作っては？

本能の近い過去の姿を残す写真展や、高齢者の聞き取り調査による昭和期本能の地図を作って、着物以外でも本能を発信しては？

工房見学の記念にはんば物でも求めてくれるお客さんがいる。本能独自のお土産品を作って販売してはどうか？

また、西嶋委員長から、「旅行企画社や京都文化博物館、景観まちづくりセンターなどを通じて工房見学をツアーの一環としたい、というような照会がある。春と秋の工房公開・匠の技実演はボランティアで行っているが、この時期以外は各工房や案内人の仕事の都合もあり、有償で行いたい。」等の意見がありました。

イベントの企画に関する意見は、できるだけとりこんで、来る3月21日「本ものに出会える日」に活かしていきたいと考えています。

今年度、本能まちづくり委員会が、「都市再生モデル調査」対象に採択されたことは、本能まちづくりを振り返り、将来の展望を切り開く機会となりました。このような意見交換を重ねて、「住みたいまち・働きたいまち・育てたいまち本能」の実現に努力していきたいと思っています。

なお、来る3月21日には、NHK昼番組「ふるさと一番！」12:20～12:40で油小路通りの様子や公開されている工房が生中継されます。中継車や機材・スタッフでお昼時に道路が混雑してご迷惑をおかけするかも知れませんが、どうぞご協力をお願いします。会場にお出でいただくか、お家で生中継放映をご覧ください。

追悼



寂しいお知らせです。
本能まちづくり委員会立ち上げ当初からのメンバー岡田稔氏(塩屋町)が本年1月13日に逝去されました。

岡田さんは委員会の広報部会の中心となって、この「本能まちづくりニュース」の作成に第1号からたずさわってこられました。昨年末発行の36号が岡田さんの息のかかった最後のニュースとなりました。今日継続して皆様へニュースをお届けできるのは岡田さんの基礎作りの御蔭と感慨を深めております。

岡田さんは「三条通を考えよう会」や、本能の生活安全活動、学区の子供たちへの声かけ等々でも活動の要となってこられました。生前のご尽力に感謝して、ご冥福をお祈りするとともに、遺志を引き継いで行きたいと思っています。(本能まちづくり委員会広報部)

「祇園さんと地域の関わりについて」～第三回本能ものしり講座～

今回は1月24日(水)午後7時半より本能自治会館にて開催され、本能学区と大変ゆかりの深い八坂神社より権禰宜(ごんねぎ)・五島健児氏をお招きし、祇園祭の性格、歴史、本能学区との関わりについて、お話をうかがいました。80名を越す参加者で、立っておられる方の姿もみられ、熱気あふれるひと時でした。



・そもそも祭りは、梅雨の疫病が流行る時期に疫病を鎮めるために行ったもので、文献では大宝元年(701)年の大宝令が初見である。その頃は「鎮花祭」といい、当時の人々は疫神が散る桜の花びらにのってくると考えて、花が散る前に祭りをしたり、また夏には、道にご馳走を供え、疫神をもてなしておひきとり願う「道饗(みちあえ)祭」をして、疫神が都の中に入るのを防ごうとした。平安時代になると、疫病が流行るのは怨霊(御霊)のしわざという思想が生まれ、怨霊を鎮め、疫病を退散させるために祭りをするようになり、貞観5年(863)はじめての「御霊会(ごりょうえ)」が、疫神を水に流すために、神泉苑で行われた。祇園祭が古来「祇園御霊会」と称されるのはこの意味からで、祇園さんで祀られている牛頭天王は疫神である。

・「祇園御霊会」の始りは、貞観7年、あるいは『祇園社伝』によると貞観11年(869)。18年に祇園社ができる前から、恒例化したのは、「官祭」とされた970年以降である。

・疫神を祀る「祇園社」は鴨川の向こうの「洛外」にあった。船岡・紫野・衣笠・花園・出雲路等で祀られていたのと同じで、疫病神が洛中に入ってきては困るからであった。ところが、疫神も丁寧にお接待すれば疫病を起こさないだろうという、発想の大転換が起こり、御神輿に神さんを載せて洛中にお迎えするようになったのである。これが「御神輿迎え」で、重要な神事。旧暦6月7日(新暦7月17日)に行い、「洛中」につくられた「御旅所(おたびしょ)」に留まってもらい、14日(新暦7月24日)にお還り願うという、現在の「前祭(さきまつり)」と「後祭(あとまつり)」の原形ができた。

・当初、お旅所は少将井・大政所の二ヶ所で、三基の御輿の往路は別々であった。康和5年(1103)還幸の折、大宮三条の「列見の辻」にて三基が朝廷の改めを受けることにより、三条通を通過して祇園社に還るようになった。現在、7月24日の夜、本能学区の三条通を「中御座」(三若神輿会)「東御座」(四若神輿会)「西御座」(錦神輿会)の三基が渡御するのはこれに由来している。

・今は「祇園祭は町衆の祭り」といわれるが、もとは宮廷の祭り(官祭)で宮廷の役人が馬長をつとめ、上皇・貴

三條通では、近年7月24日の後祭の夜に、「三條通を考えよう会」の方々が、行灯を飾ったり、「祇園祭ゆかたでDE 参上フォトコンテスト」の結果発表をされたり、御神輿をもてなし賑わいをつくる工夫をされてきました。今年は、「都市再生モデル調査」にあたり、三條通にお住まいの方々と意見交換会を持った結果、「伝統色本能のれんの華」を各家の軒先に飾り、はんなりと御神輿をお迎えし、また昨年作られた「三條通の御輿をみる会」が三條油小路角木村庄さんのガレージで見物の皆さんをもてなそう、と計画しています。

族も見物したと記録に残っている。御輿に風流の行列が続ぎ、お供も着飾り、御霊も華やかにもてなすほうが鎮まるという思想につれていろいろな芸能と結びつき、庶民が参加しやすいものになっていったのだろう。11世紀の記録に祇園祭りにかこつけて昼間は民衆が、夜は貴族が踊り騒ぎ、朝廷も止められなかったとある。

・中世では、公家や大寺社に隷属しその代わり、その保護を得て営業行為が許される、商人や職人の同業者組合「座」が発達した。北は二条、南は五条、西は大宮、東は東山の範囲が祇園社の氏子地域で、都の中でも人が多く住み、商業も盛んだったため、「練絹座」「小袖座」「袴座」「綿座」「菓子座」「釜座」等があり、祇園社に所属し、祭礼に奉仕する座商人が、神木を立てて神の依り代にする「山」や「鉾」を立て、祭礼を飾った。「山鉾」は南北朝頃から誕生し、祭りの担い手が次第に「町衆」になっていった。繊維関係の職人が多い本能学区の地域と祇園祭の結びつきはここにある。このころ本能学区には「蟻螂山」のほかに「桂山」「だるま鉾」が立った。

・応仁の乱で多くの山鉾が焼けたが、信長が延暦寺を焼き討ちしたため、日吉神社の末社と位置付けられていた祇園社が延暦寺の頸木から開放され、また秀吉が「寄町(よりまち)制度」(山鉾町以外の町も祭礼の費用を負担する)をつくったおかげで、祭礼の人的経済的援助組織ができて祇園祭を復興することができた。

・明治維新で、「寄町制度」が廃止され、八坂神社のほうも国家神道政策により国家管理されると自由な資金がなくなり、鉾が質入れされるという事態も起った。そこで氏子が自発的に立ち上がり「清々講社」を組織。祭礼の費用を捻出するようになった。この組織が現在に受け継がれている。

・明治6年太陽暦採用で、次第に祭りの日程が固定してきた。戦後は国家・神道分離命令により、祇園祭は氏子の「私祭」になった。高度成長期は祇園祭の観光化が進み、山鉾巡行路が変わったり、昭和41年には前祭りと後祭りの一体化で24日に山鉾が立たなくなったり、変化してきている。

「イベントは毎年違う企画を立てる。しかしながら神事は毎年同じ事を繰り返す。これが祭りなんです。神事の精神が残るなら祇園祭は受け継がれる。」と五島氏は締めくくられました。

その後の質問時間では「四条お旅所の祠の位置」・「本殿の建築様式」・「宮司さんや神社の称号と格」が問われ的確にお答えいただきました。

最後に本能まちづくり委員会西嶋委員長より「祇園さんのときには学区の皆さんで三条通に行くお神輿さんをぜひ見送しましょう。」とのお誘いがありました。皆さん熱心に聞かれ、関心の深さを感じました。(あ)

学区情報

本能もちつき交流会 2006・12・23

昨年から年末行事として始まりました、自治連合会・特養交流餅つき大会が、12月23日、暖かい日差しの中で行われました。前日からもち米40キ口を洗って準備し、当日は、朝から大鍋の湯気で早くも熱気に包まれていました。餅つきが始まる頃には、立見が出るほど多くの住民の方々や特養のご入居者、いつもお手伝いしてくださる府立大・立命館大のゼミの学生さん達が臼の周りを取り囲み、一緒に「ヨイショ！ヨイショ！」の掛け声を…。つき手も小学生から98歳の特養最高齢のおばあち



特養最高齢の方も一緒に

やんまでと幅広く、臼取りとの息も合って、とてもなめらかな美味しいお餅が出来上がりました。白もちに大根おろし・醤油・きなこ、焼餅、ぜんざい、また、豆餅や海老餅なども作られ、思い思いに舌鼓を打ちながら、いろいろな世代が交流を深め、大変賑わいました。慌ただしい年末にもかかわらず、本当に心も体も温まる楽しいひと時でした。高齢者福祉施設本能施設長 宮本龍家様からお言葉を戴きました。

本能学区餅つき交流会 有難うございました。

高齢者福祉施設本能は早や二回目のお正月を大過なく迎えることが出来ました。これはひとえに本能学区住民の皆様方のご協力と力強いご支援の賜物でありまして、心から感謝申し上げます。

又、昨年12月23日にはこちらでも二回目となる本能学区餅つき交流会を本能の辻子で開催していただき、本能特別養護老人ホームで生活されている方々も多数参加させていただきました。こうした学区のイベントがある度に驚いたり、感心したりしているのですがこの日も50名以上の学区民の方がお世話役として早朝よりご参加していただき、この町の結束力ややさしさをまた見せていただきました。今年は学区にお住まいのお年よりもたくさん来られ、つきたてのお餅やぜんざいに舌鼓をうっておられました。大変盛大なお餅つきになりました。特養の入居者も遠慮なく参加させていただき、年末の季節を感じさせていただきながらたくさんお餅をいただきました。学区の皆様方有難うございました。



平成19年度成人式 おめでとうございます

1月8日、本能学区恒例の成人式が行われました。今年の新成人該当者は町内会調べでは19名。そのうち女性3名が出席されました。9時30分本能自治会館で式典。タクシーで八坂神社に移動。成人祭参列後、常盤新殿にて会食・懇談が行われ、新成人が祝福されました。

「本能自治連合会の成人式に参加して」

今年二女が新成人になるにあたり、去る1月8日、本能自治連合会主催の成人式にお招き頂きました。我が家は一昨年春に東京から引っ越して来ましたがもともとは関西人（私は奈良県、妻は隣接の乾学区の出身）です。娘は生まれて以来の東京育ちで知り合いのいないことに心細さを感じていました。しかし自治会館に集合すると気さくな地元の方々に囲まれ、和やかな雰囲気とその不安も吹き飛んでいました。

その後氏神である八坂神社に移動して拝殿にて成人祭は厳かに執り行われました。雅楽の響く中、娘が無事この日を迎えられたことに感謝し、大変嬉しく思いました。私

山田町 齊藤悦啓

たちのためにお世話いただきました岡山会長さまをはじめ自治連合会役員の皆様方には心より感謝とお礼を申し上げます。

「子は親の鏡、子は親の背中を見て育つ」と言われますが、子供の成人式は先に大人になった私たち親達自身も自分を省みる機会でもあると思います。

また我が家については、少々過保護気味であったことを反省し、子離れするいい機会となりました。これからは娘を信じ遠くから見守るのがいいのかもしれない。

本能自治連合会の皆様、ほんとうにありがとうございました。

横田めぐみさんの写真展開催！！

めぐみちゃんと 家族のメッセージ

横田茂 写真展
めぐみさん 家族と過ごした13年

3月8日(木)～13日(火)入場無料
午前10時～午後6時(最終日午後5時)
堀川高校本能ホール
主催：あさがおの会
共催：朝日新聞社
横田早紀江さんは堀川高校出身です。

本ものに出会える日～おいでやす染のまち本能～

3月21日(水・祝) 伝統産業の日

午前11時～午後5時 (NHK“ふるさと一番!”で生中継)

本能学区一帯 イベント拠点・受付は本能館

公開工房・匠の実演・マイキモノプロデュース・染の体験工房

日本の伝統色のれんの華スタンプラリー

～ドールハウスと池坊生け花とのコラボレーション～

ひとこと 建物の高さが話題となっていますが、家族の歴史と地域の人間関係も大切に考えたいところです。(ゆ)

ものしり講座では祇園祭の歴史的概要から学区とのつながりまでしっかりと教えていただきました。興味は尽きません。(あ)

岡田氏亡き後、37号を発行することができ、ほっといたしました。(N村)